

愛知県立安城東高校

(上)

本校は、今から46年前、

「地元に進学校を」とい

う地域の熱い願いによつ

て設立された高校です。

私はこの4月に着任し、3回生として過ごした日々を思い起こすとともに、校訓「達」の精神を三つの要素（達観、闊達、達成）から眺め、次年度から高校で始まる新教育課程や数年後に控えた創立50周年を視野に、

魅力発信 わが校の実践

〈59〉



生徒会ポスター「〈不要不急〉に愛のある生活を！～私たちの魔法の力で～」

この自らの生活基盤である「地域」という視点を盛り込んだ新しい

二つの取り組みを推進しています。一つ目は、40年に及ぶ国際交流の歴史と入学生徒の通学圏の広がりか

グローカル人材育て、ICTを効果的に活用

ら、新たな人材育成の指針として、グローバルな視野に立ち自らの足元を見直し、ローカルな視点で行動できるグローカル人材の育成をキャリア教育の中核に据えます。

本校の在校

生は、現在、50以上にわたる中学校区から通学している。通学圏は年々拡大しております。通学圏は、新たな学校文化創造の原動力としており、異なる地域からの流入は、新たな学年生を盛り込むには、新たな地域を盛り込むだけです。

このようにハード面での整備とともに、1985年の姉妹校提携以来、親善交流を続けている豪州ベイサイド・P12・カレッジとの情報交流を一層推進します。豪州は、ICTを活用して読解力を高めている国として世界に知られています。教育におけるICTの効果的な活用について新たな知見を得て、日々の教育活動に生かします。

不可能を可能にするのは、科学技術だけではありません。柔軟で大胆な発想、行動力、そして情熱です。それらは魔法の力といつてよいでしょう。本校の生徒会は、「不要不急」に愛のある生活を！」を標語に、明るく元気に、学校生活の改善提案をしています。創立50周年を視野に、生徒と職員が一丸となって新しい学校文化創造に向けて取り組んでいます。

(村瀬正幸校長)

い総合学習を「グローカル・スタディーズ」と名付け、現在その内容と配列の検討を始めています。二つ目は、学力の向上につながるICTの効果的な活用の実証的な取り組みを推進します。既に本校は、アフターコロナ時代の学びのイノベーションとして、内外の資金を活用して、大画面テレビを設置したアクティブラーニングのための三つの専用教室や教室黒板のホワイトボード化を進めてきました。

愛知県立安城東高校

(中)

本校は現在、「ICTを活用した学習活動の充実に関する研究」(県教育委員会)と「EdTechによる『未来の教室創造に関する研究』(県総合教育センター)の実践拠点校として位置付けられている。

これは、コロナ禍以前から、これから先の時代から、これからの時代に ICT 活用による「魅力発信わが校の実践」を実現するための取り組みである。この取り組みは、これまでの ICT 活用を積極的に進めてきたことによる。現在では、ハード・ソフトの整備と職員研修を一体的に進め

ている。

ロジエクターを常設し黒板のホワイトボード化を進め、独自のWi-Fiアクセスポイントも増設している。

<60>

魅力発信 わが校の実践



マルチメディア教室でロイロノートを活用した授業

未来の教室とICT活用で目指す教育活動

ここでは、黒板を背にして語る教員の姿はない。互いのディスタンスを意識しつつ、相互評価や自己評価、生徒同士のリフレクションがしやすい環境を構築していく。また、全ての教室ですぐに映像を投影できるようア

「生徒一人一人の意見を書き写しの時間が短縮でき、思考・判断・表現の時間が取れるようになった」「生徒一人一人の意見をプロジェクトに投影し、互いの考え方を比較しながら自分の考えを見直すことができる」「生徒はスマホでカード提出できるため、英文録音など新しい形の宿題が出せるようになった」などの感想が寄せられている。

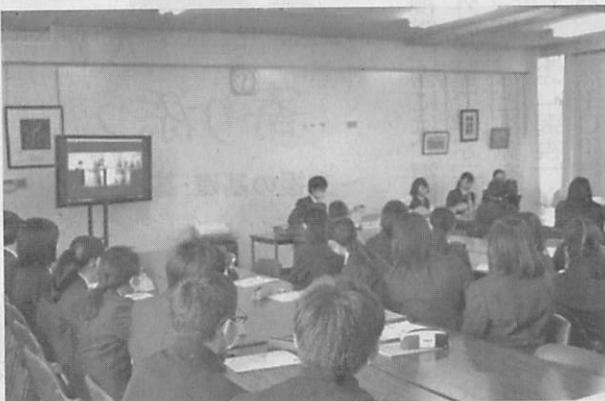
端末を使いこなせる中学生が高校へ入学する。教員が「知識を一方的に伝授する授業」から、生徒が「学んだ知識を組み合わせて新たな知を再構築する授業」へと転換するための有力なツールとして、ICTの活用を進めていきたいと考えている。

(宇佐美修太郎教諭・
教務主任)

愛知県立安城東高校

下

昨年来のコロナ禍は、今後の国際交流の在り方を考える契機となった。



魅力発信 わが校の実践

<61>

本校は開校当初から国際交流に力を入れている。姉妹校提携を結ぶベイサイド・P12・カレッジ(豪州)との交流は39年目を迎えた。毎年、生徒・教員・PTAの代表が訪豪し、ホームステイ体験、授業体験、周辺の視察に出掛ける。これは多文化共生を考える絶好的の機会となっている。豪州からも隔年で訪日がある

り、互いの友好を深めている。こうした継続的な交流の歴史は、本校に二つの大きな変化をもたらしている。
二つ目は、英語教育拠点校として、高校だけではなく地域の英語力向上に寄与するという本校の役割が明確になった。さまざまな国とのオンライン交流も進めている

地域での役割明確に活動推進

グローバル人材育成に向け

地域での役割明確に活動推進

た。一つ目は、普通科に国際理解コースが設置されたことである。これを機会に、国際交流体制が充実した。姉妹校とのZoomによるオンライン交流は、海外への留学の受け入れ体制の整備、国際理解講座の開設、ユネスコスクールとしてのボランティア活動などの推進である。

二つ目は、県から「あいちスーパーイングリッシュハブスクール」に指定されたことである。これにより、地域の英語教育拠点校とともに連携して、元の小・中学校とも連携し、英語力向上に寄与するという本校の役割が明確になった。

地域社会での本校の役割を一層明確にし、全職員一体となってこれからも取り組んでいく。

(足立秀樹教頭)